予告 Future Event

JAGDA新人賞受賞作家作品展2006
菊池敦己・関本明子・高井 薫

2007年1月9日[火]—13日[土]
12:00➜18:00(会期中無休)
会　場:名古屋芸術大学アート＆デザインセンター
[入場無料]
主　催:名古屋芸術大学
特別協力:社団法人日本グラフィックデザイナー協会
協　力:クリエイションギャラリーG8

■関連企画
受賞者による公開レクチャー＆トーク
2007年1月13日[土] 13:00—16:00
B棟2F大講義室　入場無料

1979年に発足した社団法人日本グラフィックデザイナー協会は、現在、会員数約2,400名を誇る日本最大規模のデザイン団体として、多彩な活動を行っています。その一環として1983年より毎年、会員作品集『Graphic Design in Japan』出品者の中から、39歳以下の斬新かつ作品の質の高いデザイナーに『JAGDA新人賞』を贈っています。本展では2006年度新人賞を受賞した3名による受賞作品および近作をご紹介いたします。また関連企画として、受賞者による公開レクチャー＆トークも開催いたします。

AFTER REMISEN #8
五十嵐英之×百合草尚子

2007年1月26日[金]—2月7日[水]
12:00➜18:00(日曜休館・最終日は17:00まで) 但し、2/5(月)休館
会　場:名古屋芸術大学アート＆デザインセンター
[入場無料]
主　催:名古屋芸術大学

百合草尚子　「森ドライブ」2006年

五十嵐英之　「速度と色彩 02」2006年

今回で8回目となるデンマーク、ブランデ市のレミセンアカデミーとの国際交流。2006年度にデンマークに招かれ、滞在制作および展覧会を行った本学OB五十嵐英之と百合草尚子の帰国報告展。同時開催として、これまでにデンマークに招かれた本学OB作家と本学に招いた欧州作家の小品展を開催いたします。

アート&デザインセンター 展覧会スケジュール

2007 1 EXHIBITION SCHEDULE 2007 3

Open 12:00—18:00
(最終日は17:00まで)
日曜・祝祭日休館　但し、2/5[月]は休館
12/26[火]—1/8[月]は冬期休館

[入場無料]どなたでもご覧いただけます。

12/26(火)→ 1/ 8(月)	冬期休館	
1/ 9(火)→ 1/13(土)	JAGDA新人賞受賞作家作品展2006	
1/26(金)→ 2/ 7(水)	AFTER REMISEN#8 五十嵐英之×百合草尚子	
3/ 6(火)→ 3/10(土)	site scenes 2006 帰国報告展	
第34回名古屋芸術大学卒業制作展		
2/27(火)→ 3/ 4(日)	名古屋市民ギャラリー矢田	
2/27(火)→ 3/ 4(日)	名古屋芸術大学アート＆デザインセンター	
2/28(水)→ 3/ 4(日)	愛知県美術館ギャラリー	
第11回名古屋芸術大学大学院美術研究科／デザイン研究科修了制作展		
3/13(火)→ 3/18(日)	電気文化会館 東西ギャラリー	

Art & Design Center
名古屋芸術大学アート&デザインセンター　〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地 tel.0568-24-0325　tel/fax.0568-24-2897

編集後記
今年は新潟・越後妻有はじめ、アジア各地で国際展が開催され、賑やかな一年でした。大規模国際展には政治的な思惑や歴史的背景、経済事情が複雑に絡み、その国の文化に対する姿勢が見えてきます。「アジアは熱い!」と言います。そこに日本も含まれるのでしょうか?来年はヨーロッパ各地で国際展ラッシュです。10年に一度しか開催されないミュンスター彫刻プロジェクト(ドイツ)も開催されます。文化が成熟していると言われるヨーロッパの国々が、どんな切り口で『いま』を見せてくれるのか楽しみです。

B!e　Vol.15
発行日　2006年12月22日
編　集　江坂恵里子(アート＆デザインセンター)
発　行　名古屋芸術大学アート＆デザインセンター
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地
Tel. 0568-24-0325　Fax. 0568-24-0326(代表)
Tel/Fax. 0568-24-2897(直通)
E-mail adc@nua.ac.jp
URL http://www.nua.ac.jp
デザイン　岩田知人(サンメッセ株式会社)
印　刷　サンメッセ株式会社
2006 Printed in Japan

© Art & Design Center, Nagoya University of Arts

最寄りの交通機関をご利用の場合
名鉄犬山線(地下鉄鶴舞線乗り入れ)
徳重・名古屋芸大駅下車西へ約1,000m徒歩15分
※急行・準急電車の場合は西春駅で普通電車に乗り換えるか下車してください
中部国際空港からも名鉄犬山線をご利用ください
西春駅から北西約2,200m徒歩25分、西春駅からはタクシーの便もあります

自動車をご利用の場合
名神一宮インターから10分、名神小牧インターから15分。

大学基準協会認定マーク
本学は2006年4月に認証評価機関である大学基準協会の大学基準に適合と認定され、正会員になりました。
認定期間は2006年4月から2011年3月までです。
これによって法令化されている「第三者による認証評価」にも合格したことになります。

NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS
名古屋芸術大学

B!e

2006 Vol.15
ART & DESIGN CENTER NEWS

特集 アジアの視点 Asian view

●アジアの視点〜マルコ・ポーロの網膜を通して

今、様々な領域で、"アジア発"の元気がいい。
現代中国を代表する作曲家タン・ドゥン〈1957〜〉のオペラ『マルコ・ポーロ』は、1996年のミュンヘン・ビエンナーレで初演され、絶賛される。
「君が音楽を創るのか、それとも音楽が君を創るのか?」※タン・ドゥンは、中国南部の僧侶から問われ、15年の歳月を経て『マルコ・ポーロ』の作曲に着手し始め、ようやくその問いに答えることができたと言う。
中世聖歌からモンゴル風読経へ、オペラから京劇へ、オーケストラからシタール、中国琵琶、チベット仏教の宗教楽器のホルンまで、地球上のあらゆる関係からの音楽的サウンドの融合が、彼にとっての『マルコ・ポーロ』の定義となり、彼を深淵な旅行に導いたと言う。
このオペラの台本を手がけたポール・グリフィス〈1947〜〉は、「旅行というものは、始まりも終わりもなく永続している夜明けのようだ」※と語る。
そして、タン・ドゥンとポール・グリフィスは、オペラ『マルコ・ポーロ』で3つの旅行、つまり地域の旅、精神の旅、音楽の旅を考える。
その結果、"東西の出会い"でもなく、エキゾティシズムのつまみ食いでも、東西のぶつかり合いでもない、多層的な根を持った作品が完成する。
通常、マルコ・ポーロは西洋からの視点で語られて来たのに、ここでは西洋人ポーロの網膜を通して現代中国人の視点が映し出されている。
今回、アーティスト・イン・レジデンスで招いた台北の3名のメディア・アーティストの制作過程や作品にも、これとよく似た感想を持った。
駆け抜けるような、精力的な創作ペース。集中力と、通過している感触。無国籍な作風。華奢であるのに強い・・・など、それは今まで招いて来た欧州作家のアーティスト・イン・レジデンスでは感じることがなかった感想である。「タン・ドゥンの音楽には、私達のまわりにありながら長い間耳を傾けることのなかった自然の中の音がある。それは、東西の境がなくなっている今日、わたしたちがずっと求めていたものだ。」※
かつてジョン・ケージが語ったこの言葉が、今や中国をはじめとするアジアの芸術家が生み出す仕事の中に、たやすく見いだすことができるようになって来たのだろうか。

※ CD「タン・ドゥン：歌劇『マルコ・ポーロ』」(ソニー・ミュージックエンタテイメント)ブックレットより

美術学部版画研究室助教授　西村正幸

写真は、2006年10月27日〜11月8日までアート＆デザインセンター企画展として開催した「Pass－空間の中のリズム：台北のメディア・アートから」の展示風景。作品上から Chan Hui-chao「浮雲 流水 人家」2006、Lai, Tsun Tsun「春夏__冬」2006、Tsong Pu「Rabbit and Fox」「拾穂」、Chan Hui-chao「Inside of Memories」
撮影：サクマタカヒロ

特集

Asian view

アジアの視点

中央美術学院(北京)の外観

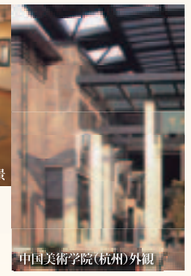
「形式と拓」展 中央美術学院(北京)にて

現代中国のアート事情

北京には酒廠国際芸術園、宋庄、芸術東区、索家村、費家村など様々な芸術村が点在しているが、中でも大山子芸術区の 798 工場跡は群を抜いていて一日ではまわれないほど大きい。ここは取り潰されそうになったが、経済と連動した文化創意産業地区として 2008 年北京オリンピック後も延命が取りざたされている。798 はもともと毛沢東の計らいで旧ソ連の援助と旧東ドイツの設計施行によって建設された国営工場だったが、その歴史的、文化的、建築的な文化遺産としての価値を残そうと、政府の支持を得て工場跡を芸術区として存続させようと各種イベントや様々な芸術活動を行っている。そもそも美大生のアトリエが多く集まっていた場所だが、今では世界からギャラリーが進出したり、芸術家が住み始めたり、そして本屋やアトリエやデザイン・スタジオやカフェなどが集まり 現代アートの発信基地となっている。

中国美術学院(杭州)アトリエ

中国美術学院(杭州)美術館展示風景



中国美術学院(杭州)外観

上海では、つい先月まで 1930 年代保存建造物の上海美術館をメイン会場に「超 設 計 ／ ハイパー・デザイン」というテーマでビエンナーレが行われていた。中国ではデザインは設計といわれていて、ファイン・アートと分けられているが、今回は拡大・拡張するデザインの観点から美術・デザインの新たな社会的役割と可能性を模索しようとの試みで、「デザインと想像」「日常生活の実践」「未来の歴史構築」の 3 カテゴリーで構成された展覧会。ディレクターは上海美術館副館長の張晴氏。110 名の国内外の有名なアーティストの作品が展示されていて盛況だったそうだ。上海にも紡績工場跡の芸術区(莫干山路 50 号)があるが、北京の 798 に比べて小規模である。しかし、この国際的でモダンな文化風土は、新しい文化芸術都市に変貌するに相応しいドメスティックなエネルギーと可能性を秘めているな、とほんの短い滞在で実感した。

中国の美術教育はどのようになされているのだろう?名古屋芸術大学との国際交流展「形式と拓」を実施・開催するため、姉妹校でもある北京の中央美術学院を訪れた。ここは中国でトップの国立美大、全国に名が知られている。美術教育は旧ソ連の影響が強い。最近は世界各国と国際交流を行うなかでアニメ教育や新しい現代的な美術表現も積極的に取り入れようとしている。

次に訪れたのは、上海から列車で 2 時間半の杭州市にある中国美術学院。中央美術学院のライバル校として、整備されたモダンな施設・設備と緻密な教育カリキュラムによって運営されていて、全てにバランスが良い大学である。現代美術の教育も盛んで、学生の自由な選択を認めていたことが少し意外で、とても印象に残った。

両大学とも美術館教育にも力を注いでいて、いずれも構内に新しい美術館を建設中である。中国美術学院(杭州)は素晴らしい美術館が正門脇に既にあり、中央美術学院(北京)は磯崎新のデザイン設計による新美術館を建てているところである。

高層ビルが林立し、まさに世界を呑み込まんと成長し続けている中国。この大国は政治経済のみならず、あらゆる分野の実験場としてバブルの様相を呈してきている。新旧入り交じり、建築や人が混在し、一夜にして入れ替わる大都市のエネルギーを吸収しながら、これからこの大国は世界に、そして未来に何を示すのだろうか。ただ、言えることは とにもかくにも 中国は正しきリーダーとして世界を導く責務を果たさなければならないことだけは確かのようである。

美術学部絵画科教授　大崎正裕

Media_City Seoul 2006 ソウル(韓国)

10 月 18 日から 12 月 10 日までソウル(韓国)で開催された Media_City Seoul 2006 (Seoul Museum of Art) に招待作家として参加した。この「Media_City Seoul」というのは 2000 年から開催され、今年で 4 回目を迎える本展は "Dual Realities" というテーマでくくられ、国内外含め、おおよそ 70 名の作家が参加した。

テーマである "Dual Realities" とは二重のリアリティーという意味で、日常生活において私たちが物質的なものと、例えば Web の画面に見られるような非物質的なものと関わるとき、今日的にはもはやどちらがリアルなものであり、そうでないかは明確な区別がつかないのではないか。そうした環境に対するそれぞれの作家の視点を作品という媒体を通してクローズアップしている。

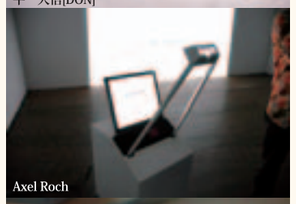
本展覧会は International Media Art Biennale というくくりだが、メディアテクノロジーを駆使した芸術作品というよりは、映像媒体を用いた作品が多くみられた。いまやほとんどの作家が、映像メディアを編集できる環境に身をおけるため、こうした作品制作の成り行きは必然なのかもしれない。

展示形式としては、インタラクティブ、映像、インスタレーションと多岐にわたるが、作品内容に関して、個人的には安心感を得る作品が多かった。というのも私の目には、ある時期に多く感じた『ヒステリックな』作品が少なくうつったからである。出点数が多かったため、全体の傾向を一言で簡単に表すことは出来ないが、作品の形式や内容が、ソフトなもの、わかりやすいもの、見やすいものが数多く目に付いた。今回の展覧会では、芸術作品としてしか見ることができなくはない、という意味で汎用性のあるメディアが多かったように思われる。

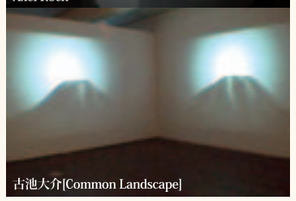
デザイン学部非常勤講師　古池大介

Media_City Seoul 2006
ビエンナーレのバナー

牛　大悟[DON]



Axel Roch



古池大介[Common Landscape]

今年アジアで
開催された国際展
DATA

第 3 回越後妻有アートトリエンナーレ 7 月 23 日〜9 月 10 日
http://www.echigo-tsumari.jp/index.html
第 1 回シンガポールビエンナーレ 9 月 4 日〜11 月 12 日
http://www.singaporebiennale.org/
第 6 回上海ビエンナーレ 9 月 5 日〜11 月 5 日
http://www.kwangjubiennale.org/
第 6 回光州ビエンナーレ 9 月 8 日〜11 月 11 日
http://www.kwangjubiennale.org/
第 5 回釜山ビエンナーレ 9 月 16 日〜11 月 25 日
http://www.busanbiennale.org/2006_new/index.php
第 5 回台北ビエンナーレ 11 月 4 日〜2007 年 2 月 25 日
http://www.taipeibiennial.org/index.html

798(北京)

798(北京)

レビュー REVIEW レポート

佐藤 浩・SCRAPLAND 展

2006年11月7日 − 12日
スペースプリズム・デザイナーズギャラリー／名古屋市東区

細長いギャラリーの床面や設えたテーブル上のそこかしこに、金属質の多様な生き物たちが、それぞれの個性を放ちながら、静かにそれでいて賑やかしく存在していた。工業製品の部品や、錆びた断片などの集積によるいわゆるジャンクアート(junk art)と呼ばれる表現の枠組を越えて、それらはとても魅力的であった。象などの哺乳類から、鳩などの鳥類、蟻などの虫から魚まで幅広く、はては宇宙人(?)まで登場する。

ギャラリーの壁面は、それぞれを視覚要素の主役にした平面作品が、ぐるりを囲んでいた。巣の中で寄り添う石の卵 − 汀線上に在る魚骨 − あり地獄の底にいる蟻 − 剥き出しの身体で遠くを見つめる鳩など、「Tomorrow is Too Late」と記されたポスターの連作は、生命の境界線もしくは点が明解に示されていて、どれもメッセージ性の強いものであった。瀬戸際の重いテーマにも関わらず、いずれの生命も「生」への意識をそこで確かに示しているように感じられ、観る側としては救われた。それはグラフィックデザイナーとしての作者の在り方や、本質につながることなのであろう。

他にも生き物たちはカレンダーの中では、月ごとに日付数字(タマ)と伸びやかに遊び配されていた。また生き物たちが実際に動き回る映像作品も発表され、興味深かった。立体と平面、静止画と動画、イメージとメッセージといった関係を越えて表現する作者の有り様に、表現の幅と奥行きについて再考する良い機械−機会となった。

デザイン学部デザイン学科教授　落合紀文

庄司達　Cloth-Behind・ISE

2006年9月16日 − 12月24日
伊勢現代美術館／三重県度会郡

戦後日本美術史を再考する動きの中で、1970 年の「人間と物質」展(第 10 回日本国際美術展:東京ビエンナーレ)は、一昨年あたりから頻繁に検証されている。コッミッショーナであった中原佑介氏の先見性とともに、いかにエポックたる画期的な展覧会であったとの再評価が高まった。この「人間と物質」展での中部地区から唯一の出品作家が、庄司達その人である。まさに庄司さんは、戦後美術の証言者(!?)でもあり、衰えぬ旺盛な探究心で制作し続ける "現代の" 作家。そんな当時のあれこれを、ご本人から伺うにつけ、当時の若い作家たちの社会に対する敏感さや即応性には、興味がつきない。戦後モダニズムに対する歴史観を自らが構築せねばならないという、渇いた欲望が伝わってきてなんとも刺激的である。考えて、考えて、そして行動する作家たち。庄司さんは、そんな作家の姿を今も体現し続けていると思う。

新作発表は、伊勢志摩国立公園の五ケ所浦に建つ白亜の個人美術館の開館三周年記念展。メインフロアには、鮮やかなオレンジ色のポリエステル製の布が、帯状に床から立ち上がって五つの山型を成した。滑らかにして凍とした表面は、布の裏側にできた空間への関心を効果的に誘う。佇み観る位置によって変化するジグザグの、不定形な空間。展覧会期中には、庄司さんが席主をつとめた「茶会」が開催されたそうである。饗宴的な遊び心とともに、意識的に約束事と対峙する場を設定。そんな「わび」の美意識への関心は、日本におけるモダニズムの位相を問うという観点と、あながち無縁ではないはずだ。

まさに「空間」を考察する達人である。

美術学部美術文化学科助教授　高橋綾子

「1日」天王貯水池

2006年11月4日 − 5日
旧天王貯水池／大阪府堺市堺区

大阪、京都、神戸に次ぐ関西第 4 の都市、堺。その山の手の閑静な住宅地に「旧天王貯水池」はある。明治 43 年に落成し、昭和 37 年まで使用されていた上水道施設で、煉瓦造の 5 つに区切られたヴォールト架構からなる貯水槽を有する。近代化産業遺産の保存問題が注目されている昨今、ますますその文化的価値が重視され、平成 13 年には登録有形文化財に指定された。以降、地元まちづくり会の努力もあり、春と秋の年 2 回一般公開を行ってきたが、今回初めての試みとして「新たな文化財の活用」というコンセプトのもと、同空間を使ったアートイベントの企画立案の依頼があった。7 月の現地調査の後、「水の記憶」というテーマが決定。関西を中心に活動する現代美術家、映像作家、華道家に協力を打診し、インタラクティブな音響システムと OHP を用いた映像装置によるコラボレーション展が 11 月に実現した。企画タイトルの「『1 日』天王貯水池」とは旧天王貯水池を振ったものであり、そこには文化財としての建築空間と参加者が出会う特別な日というメッセージが込められた。

地域振興のための重要な舞台として旧天王貯水池とその周辺環境を位置づける熱意ある地元団体と行政は、今回の企画展をまちづくりにおける市民参画の好機として捉えており、その強い後押しに助けられながらの一般公開となった。わずか 2 日間の開催であったが約 3,500 人の来場者があり、次年度以降の展開を考える上でのモデルケースとなったようだ。

デザイン学部デザイン学科講師　池側隆之

織咲誠のInter_works展 inNAGOYA

「線の引き方次第で、世界が変わる_織咲誠×名芸生」

2006年11月17日 − 26日
T.A.G. IZUTO(名古屋芸術大学アートスペース)／名古屋市中区

一昨年の織咲誠と原研哉による「FILING 展」は、見えづらくなっていた "デザインの良心" のありかを改めて示してみせた試みとして記憶に新しい。その織咲が今年銀座で初の個展を開催し、これを期に本学学生の熱意によって実現したのが本展である。

ギャラリーには、〈インターデザインアーティスト〉を名乗る織咲が手がけた「領域横断型」の多様な提案が紹介された。全長を変えず曲げ方を変えるだけで機能が付加されるクリップ、穴を開けただけで新たな価値を生む容器や葉、既存技術の使い方を変えただけで新たな用途を得る印刷物など。この "だけ" という一見ささやかだが実に素直な対象への接近が、ともすると過剰やこまかしに溢れる世界に対し、真摯に "まっとうさ" を示そうとする織咲の確信に満ちた方法論なのだ。

〈より少ないものによるより多く〉織咲はこのフラーの言葉をクリエイティブの礎として掲げている。絶えざる観察と実験によって人類の暗愚に挑んだフラー。"知的遊戯に陥りがちなデザイン" に背を向け、臆せず既存を見極める "ハイパーアマチュア" であることを憚らない織咲の手になる作品からは、確かにデザインの奇才:フラーに対する思いが感じられた。

今ひとつの注目は、「織咲誠 X 名芸生」の企てた。学生が織咲の視点を咀嚼し、それを体現する事実の探索を「Research of Line_works」として提示している。この展覧会が単なる作品展の形式を越えて、動的なデザインの実験場としての空気を宿した理由がここにある。

デザイン学部デザイン学科助教授　萩原 周

撮影:松永結実

RELAY ESSAY

イェーナ

中河　豊

イェーナは、12世紀まで歴史をたどれる古い小都市である。それは16世紀の宗教改革の時代にザクセン公の支配下に入る。大学が設立されたのは、このころの出来事である。大学はルター主義正統派の拠点となり、30年戦争の後にはドイツでもっとも多くの学生を擁するようになる。

18世紀に入り、大学は新たな発展の時期を迎える。ワイマールのアウグスト公とその大臣ゲーテのもとで大学は1790年代から1800年代にかけてシラー、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルが学問を教授した。大学はドイツ観念論の成立と発展の拠点となったのである。

私がイェーナ大学哲学研究所の客員研究者として滞在したのは、すでに10年前である。そのころは1789年のいわゆるヴェンデ(Wende:転換期)、1990年のドイツ統一からそれほどたっていず、大学も変化の只中にあった。研究所のメンバーもほとんどが「西ドイツ」出身に入れ替えられていた。私が滞在を始めたときにはカール・マルクスの銅像があったが(マルクスはこの大学にデモクリトスとエピクロスの差異についての博士論文を提出したのである)、それもまもなく撤去されてしまった。

写真は、2005年のものであり、現在この市場は美しく作りかえられて、私が生活した当時の面影はない。しかし、私はこのテューリンゲンのこの小さな都市に限りない愛着を感じている。

音楽学部教養部会